

目玉焼きがすっかりつめたくなっている。

とうさんをおくってから、さっそく紙を開いた。

『呼人を探せ。タイムリミットは今日の夜だ。』

「呼人」ってのは、ぼくの名前だ。「かわった名前だね」とよくいわれるけれど、音のひびきがよくて、けっこう気に入っている。

「ぼくを探せ、だって？」

紙をみつめながら朝ごはんをたべおえると、いつもの朝とおなじように、ぶつだんに手を合わせた。

写真の中にいるのはかあさん。でもぼくは、ぜんぜんおぼえていない。ぼくが二才のときに、病気で死んじゃったから。それに、とうさんは、かあさんの話をほとんどしないから。

かあさんで、どんな人だったんだろう。

想像しても、「かあさん」というひとりの人のすがたにはならない。それでもときどき、写真に話しかけてみる。

「ねえ、かあさん。とうさんのこの紙、どういうことだと思っ？」

そのとき、げんかんのベルが鳴った。

「よーびーと！ おれだぞー」

カッチンだ。そうだ。今日はカッチンと、学校のプール

へ行く約束をしていたっけ。

「プールに一番乗りしようっていったじゃん……って、おまえ、何もってんだ？」

背の高いカッチンは、長いうでをのぼすと、ぼくの手から紙をサッととりあげ、すばやく中を読んだ。

「なんだこれ？」

「とうさんからなんだ。ぼくはここにいるのに『探せ』って、なんのことだと思っ？」

ぼくがきくと、カッチンは首をかしげた。

「うーん、もう一人、どっかに呼人ってやつがいるんじゃないの？ おまえのいことかさ」

「いないよ」

「それじゃ、場所の名前かな？ 呼人山とか呼人沼とか」

「知らないよ」

「ああ、店の名前かもな。『ゲーセン呼人』『コンビニ呼人』『ラーメン呼人』」

いいながら、カッチンはケラケラわらった。

「もう、まじめに考えてよ」

「つづきはプールで考えようぜ」

カッチンにひっぱられるように、ぼくは学校のプールへ出かけた。

ドボンとプールにとびこめば、いつもならむちゅうで泳いでしまうのに、今日はぜんぜん気分がのらないし、ちっ